

911.3
7

俳諧
白
竹
中
心
記

題茗花集卷首

胸中錦繡極精

神一卷茗花任

見新古昔蕉翁



創業後誰知今

有若斯人

癸巳五月十三日

松齋本間洵題書



Handwritten text in cursive style (sōsho), consisting of several vertical columns of characters. The text is partially obscured by the seal impressions and is difficult to transcribe fully.

高野山

父母悲願子出子離子の夢

の石夜泊

船室をともり舟を暮らす其乃月

四國の大海村

舟を籠り代わく小田原の屋裏

舟のこもり

一聲のこもり横山を暮らす守

たの文汲娘山

而影を映えたる流る月の夜

一破井流

ふと川流るる一破井流ぬ文夜

中記色川田

古池の畔を流る水はおき

流るる水はおき

あやめ流るる水はおき

日光山

出らざるやまの峰を眺むる日の光

に雲見の滝

暫しの滝を以てしや 其意を 禱

下流の木の宮

一処を以て松馬の形に川 流

坂東九葉の札下

下流の如く日に 舞而る 秋乃 風

日光山

山脈を以て河を以て 其意を 禱

滝を以て

物事を以て 解し 其意を 禱

小子の如く 旅の 色に 其意を 禱

旅の 色に 其意を 禱

歌仙

雪中庵 卷之六

岩けし 頼みえり 持もちて ちかき 守
 ちかき 孫まごの 松まつの ちかき 母ははの 巴よ明
 内舎うちやへり 又またの ちかき ちかき ちかき 月つき集
 照あきり ちかき ちかき ちかき ちかき 太
 ちかき ちかき ちかき ちかき 月つきの ちかき ちかき 明
 七なな夕ゆふ ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 集

持もちて ちかき ちかき 持もちて ちかき ちかき ちかき 太
 持もちて 自みづか利りの 心こころ ちかき ちかき ちかき 明
 流ながは ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 集
 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 太
 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 明
 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 集
 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 太
 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 明

二
三
日暮帆影は空をこえて出帆ハ
たつた五両の夢ささぐえの蔵
同くしる月くくく先び木
安んじ思ふ家を雀守
振向くあけり瑞法の家を載
よふ勤し十能古瑞
幽冥とすし中よ民よ釣あけ
半れたとこよ成り橋板交

果 右 明 今 果 明 右 果

あつたふさふさよ又目の舞ひ形
林下のささき峰空しり空
夜は星をよきとて仰ぐわき綿
溜りしきつり我息を驚き
さる北と海騒る白い年婦子
三徳をたほり右侍をまもり
形かしる人をたえと寂之下
やそき寺を新くし川を

大 明 果 右 明 果 右 明

染染子轉々ぬ先の下小神
老女此傳のゆき川かしら
吸物此之をさきてハ叶申
くまきとく是布のこう類 物告
むらむ此近む車も花の陰
けまきまきまのまき風

安永子夏月健舎無水

Agon no Yoko no Aki no Tsukune no Mitsu

太 染 太 染 太 染 太 染

天明のまきまきと左の伊豆さくら
おまはる天城山の林下花那を教子
かまはるまきまき人歌かき 強き下
了而ま肥る里花本氏よ是まはる
編心ま後まはる水一 遠田珠文堂
時々々日遠花波紋を船まき 遠系
田子ゆき下沖まき 月果
猪川と海をふらむ友の雲

月果

明巴... 巴明
... 科... 又...
... 自... 獄
... 浮
... 不
... 不
... 巴的
... 子

... 月景
... 已
... 已
... 已

... 景
... 巴的

下田の溪をかく白浪砥地り磯辺けり
いしと塔と山と人海と山と
と子と橋と辻波とさきと
とる塔と山と

この歌の子とあきとや塔のまを溪月景
故野群牛犢り歸り古くをわたり
二年のうき探暁花りておきえ巴ぬ
河は始るに水をらむわたり川と山と

赤海山角口場に津宿邸の五峰の
塔あり

興しき子と推の長月景
段形を田と投石の名
投石の名ら切きと物名を巴ぬ
伊東守佐義高見之との名を
熱海今井二徑の許は宿を
六名の湯河子畑ハ石河

雲の巻は高くを鳴 高き雷よりも強
適より人ハ唯 孫を掃るに

之より煙 蹴めけし 飛き去 巴ぬ
枿の半記 後正の社 深後后の都 雲伊
夏山 控り 走り 湯め 滝 男 紙 あり
見ありて

葉のまゝ 下 秋 雲 ぬ 小 雲 霧 の 木 の 家 月 葉
何と 兼 守 孫 走 り 湯 の 屋 上 あり 全

雲の巻は高くを鳴 高き雷よりも強
適より人ハ唯 孫を掃るに
之より煙 蹴めけし 飛き去 巴ぬ
枿の半記 後正の社 深後后の都 雲伊
夏山 控り 走り 湯め 滝 男 紙 あり
見ありて

雲の巻は高くを鳴 高き雷よりも強
適より人ハ唯 孫を掃るに

巴明

寛政十年年派生山和の六日付よその
 一々一様字跡踏あらし出川を越え
 本日あまのよめと名の浦に汐居舞
 一伊勢の南形楽おあき免
 一残り耐る若きも道まきの風
 一くまあきびり熊形歌よおむを三訓
 一持取りし詣那智山観音一孔ろろ
 一と一免

一きやびりくちを初浪瀬にお
 一宿松ららららゆきと大をく取小中を
 一十丈峰ふらり熊形寺一の難所を
 一越え成寺より由良の岬をくま
 一紀三井寺より
 一更衣旅より一寺より紀三井寺
 一海舟より一味岩山より利水寺の浦
 一より一西條下をくまより一加田免

くらしん

賊より引取流石は福志の上
粟山明神降水泉路はかき信田の
木よりまじに淋しきれ者おれん
花よりまじに淋しきれ者おれん
とがして志が事候はか越山と
又都の事おれん事候はか越山と
橋の本名は清治の紫陌より

橋うの名新の心静く名出
須磨の石波りさくら花子の
はあは中を静く渡後より象路山
乃海より水巻の息吹山
文通より石波りさくら花子の
八島壇の浦より船軍の心
合て自然の洞より花を

降参の川の舟より船をこし三島の舟
おとの瀬戸より舟をこし船
島舟を因防の綿帯橋ふと見え
遊覧を夜泊せし

舟をこし波濤の敷田能みま
舟の舟やこし舟をこし
舟をこし横をこし舟をこし
舟の舟は舟をこし舟をこし

乃頂は安黒を舟をこし舟をこし
舟をこし舟をこし舟をこし
舟をこし舟をこし舟をこし
舟をこし舟をこし舟をこし

又けの舟をこし舟をこし舟をこし
舟をこし舟をこし舟をこし
舟をこし舟をこし舟をこし
舟をこし舟をこし舟をこし

ハき色天の摺立切戸の文殊成相
観音と侍し日本三景とす地蔵
よ謝の海よ小舟と浮めし黄昏と折れし
又夕虹と又折れし中とす
由るの藤名狭の隈とす竹生とす
通夜とす徳のまはるとす
月とす急流とす
京の御守とす

洛外とす残る船とす大和河内
の旧跡とす日とす難波の大海とす
さし流石の磐とす
濠とす難波の河内とす
流の痕とすお糸とす色とす
みまけとす案とす不破の舞
とす

二十三番管沼の札廻り

廿を照す松を彩はるる

三つあつたハハ松よき髪を束の束のよき髪よき

くまなく松旅百廿日あるの風

忘るも歌やしつるまきとるる小松

の中山守持の谷も旅を延ばしにきい

しつ七月十日家家よ歸り

文月のみより松父の歌

松吉の松遊まふ松又雷年三月廿二條

崎は清見しと松曳了甲斐の裏不二

又返り日を強う後訪明舟一語浴水

の帆を舟月の空時つらつら松操を舟

跡く文汲田毎よ心集きて舟あり

松を舟舟有利戸徳山よあり

其の松やまの志の松を舟あり

浅く河口松を舟よあり舟一石井崎を松

妙義様名のむらじり

賢然いし 禪はー 宮柱

三好山と掛子寺一山又山は五経沙の口伝

火口向の妙音家くの棧別ふささ巖

中務を掛く里ま下野

山姥の強も似る 旅さー

狭又三十四宮をめぐり利根川を戦

岩毎に花を挿し 垣東十七番の流山

岩屋禪堂ー

おきとらうその極楽を約束の毛

日光山

さー風や杖藜の日の出入り

中野寺湖水舟の信後重見えの滝を

見ゆ所さほの宮は梅りあふふ川を

静なり室の八幡は借安やーの小

宮は名をー

新よもしの海一も夕しの龍

皆田中をよこす

花香は古風のくさくさを被るも

猿の目数重花の遠く片よ借付後

六月の水はくさくさ冥加の節

武士の人の備ふき神を招合ふ吉原

の金髪をよめるもあきら

風流の風流細やあや綿

四季子

花のまはる人をもつ性本成

春の夜や敷きこえり西の系

のくらをまわつて照す勢田の橋

物ぞと留る花家をもつた風

らぬやよふふまよふ花のうらも

をよめし不この裾おくまはる危

人をよめし木の丸座の輝のあや

夕暮わくし銀の月のこぼれ
きり帆柱をさして東の空に
舞うる雲を流す夜の田の
さやけきよき望雲の舟の夕暮
暮積りて霞をさして夜を
朝影を鏡のよの影に
後山月夜鳥の集るる
寒きよき白雲の夕暮

空の物水に東の風をみぬ

花の影を月雪

あけの空に
花の影を月雪
舟の影を月雪
舟の影を月雪
舟の影を月雪
舟の影を月雪
舟の影を月雪
舟の影を月雪
舟の影を月雪
舟の影を月雪

名目やを舟の跡より松の影
の月や船きつ了様
そとれけ家子の様
上巖もや
雪の杖子よ

三山日記
文

ほめり
乃中
と
う
何

三山人巴明

追加

美子也遊まじく風
夜のそよ風おそく
藤の帯帯細解く
おそく守杯のそよ風
おそく守杯のそよ風
おそく守杯のそよ風
おそく守杯のそよ風
おそく守杯のそよ風

明月かり
少夜も
おそく守杯のそよ風
おそく守杯のそよ風
おそく守杯のそよ風
おそく守杯のそよ風

此十二帝ハ啓ミ流川文化の度

活作ノ草遠乃田鶴也

下ハ秋后の海舟の風子也

妓王妓女

相國高樓帝闕傍
芳年姊妹画眉長
玉簪麗日爭春色
舞袖宮華添寵光
題壁愁留秋草賦
寄身深鎖梵王房
只今惟見嵯峨晚
晚象淒涼木葉黃

新名二葉

妹容以花の浮移りりり

文目出虫

七つ〜月俄に枝屋〜

古里雪

人〜

七賢人

琴待春の景と酒砂と草

菊の角嵐を

蝶多し花友の扇乃袖たもす

寄物二句

鴉 雁 水鷺 鶺鴒 鷹

うさぎのけり日さきくるとあかき

文月や神の洗ふ了紙 硯筆

庚寅二年おかけ糸の曠るあや

綿多しかき得くもか伊勢紙か

歌多寄りもの句岨縁松林の傍

くさくさ花はあまをさかす

人申す

つらき雪舟先海よりかき

揃りけよ雪は色もあまの葉

かし

巴ぬ

白雪先かきをゆきくさのま

可
子

孫
友
也

先
の
孫

蕉門古人真蹟

二十
乙
点

内
七

本陽
意
為
桃
書



ハ
マ
カ
タ
シ
ラ
の
の

の
の

の
の

藤の巻

金魚

水と魚

二十

其角

藤の巻

水と魚

水と魚

水と魚

水と魚

水と魚

水と魚

水と魚

水と魚

任公のまふり
中
知人

三
解

申

ち
雪

あ
小

雪
八
箱
舎
見
也
ト

新
正
自
抽
け
さ
う
ら
ら
る
る
ぬ
ぬ
人
か
ら
く
ら
い
た
ら
し
く

嵩陽
花
曲
十
雀
自
画
讚

あ
ち
さ
ら
る
る
ち
り
月

ま
ま
や
り
早
う
ら
ら

十

新

清

スハゲキ

軟乃

クチスハゲ

ふつや梅花

乙

屋形

散

杉

梓

凡

うち

かかる

心茶花下小室
 舟竹
 花下小室
 舟竹
 花下小室
 舟竹
 花下小室
 舟竹
 花下小室
 舟竹

古学之室中卷
 山風堂
 日吹
 三母
 太



二世雪中菴更登真蹟

Handwritten cursive text in a rectangular frame, likely a copy of a poem or letter. The characters are highly stylized and fluid.

四世雪中菴更登真蹟

Handwritten cursive text in a rectangular frame, similar to the right page. The characters are highly stylized and fluid.

雪中

田中... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三

卷之三
卷之三
卷之三
卷之三
卷之三
卷之三
卷之三

禪寺。一日... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三
... 卷之三

里圃
馬覓
翁
曲翠
翁
卷之三
卷之三
卷之三

静はあは舞をささむ歌 其角

空際乃遊説の歌のたさるべき 全

あはあはのりり利 金二万両 歌人

ひ里よささのささるたささささ 翁

はははのりりせむむのりけあの 歌人

あはあはのりり君まははははは 曾良

さのさのりりかき花ささささ 松風

あはあはのりりさささささ 桃娘

春の梅は枝は風は倒さ 熊坡

さのさのりりさのりりさささ 鼠金

あはあはのりりさささささ 利牛

今よさささささささささ 形坡

あはあはのりりさささささ 鼠金

いらいりりりりりりりりり 利牛

孫の歌さささささささささ 多寛

孫の歌さささささささささ 翁

不家新思此乃去九右
部自心其振舞也
一室寂之 矣年此一
無中 乃其 以 楓
山中 寂 乃 月
亦寂 一 田 乃 乃
在 里 乃 乃 乃
張 乃 乃 乃

惟然
爲
支考
惟然
爲
支考
彌頌
路通

不家新思此乃去九右
部自心其振舞也
一室寂之 矣年此一
無中 乃其 以 楓
山中 寂 乃 月
亦寂 一 田 乃 乃
在 里 乃 乃 乃
張 乃 乃 乃

野次
重五
爲
杜國
彌頌
正香
彌頌

花見のついでに女子と遊んで連まて
毎

子らふふふふふふふふふふふふ
出水

このまゝに魂をのこすやうに入
為今

そのまゝに日をいふおれり
舞

彼をさし一まはるゝのまゝに
形披

三人ふふふふふふふふふふふ
執手

又別字のついでに桃梅あな

ついでに南風をよこす

あなつちの柳をよこすのついでに
こゝろ

蕉門十哲高身冷身知難

まのついでに面おもむき
晋子 具角

文七郎くはるゝのついでに
雪中庵 嵐雪

何事をもいふ人のついでに
落梅舎 玄来

夕魚乃汁ハ秋をよこす
獅々庵 支考

長松の親の名を木心堂浅生菴野坡

初晴子海は舟の名を千哉智氏哉人

幾人うし九色のきぬ物田の橋松木山丈草

空雲して子の勅を心園五雲具松風

久名は海をもし集る夜を五老井許六

年の轡や浅舟くいのを舟弱翠亭北枝

同よりまき紫山歌をくし松魚達人景堂

夕波の舟よきこ申りなうふおぬ 孤屋

何名お申れ一喜も念を今り科 利年

表り解涼しきぬやあつきあつ 乙刻

まらや山兼よつすし知子共あや 西堂

冬衣やふきく物や子のついで 路通

一巻まきし三井寺くし柳心也 尚白

智恵乃あゝ人まらんを女子也弥碩

まらうし内外し那き志加久の里 重五

廣沢やひし時を治をらぬ 史邦

友藏... 甲斐... 夜... 狼... 文... 夜... 浦... 藪... 眠...
 且葉 沽圃 傘下 馬 里 岱水 岩 悟 羊 殘

此... 乃... 葉... 井... 一... 羽... 胡... 一... 笑... 一... 笑... 素... 龍... 雪...
 猿 井 一 羽 胡 一 笑 一 笑 素 龍 雪

伊賀藩中

臺舟はまや伏見の枕の花 太白堂 桃隣
 松島や鶴の身とてと云ふ武白魯良
 之世お教へ改にかき本や相の苗 洛醫 凡北
 似合しき女子の一室お出づの里 岩菊丸 杜國
 志し魚の骨や卦部々 大江山 尾陽 荷今
 麦喰し一雁やおもへとあまきり 名古屋 野水
 一の音又き通し日我社の風 膳所 正秀

くらりややま漕才了 名葉舟 松倉氏 嵐蘭
 夜よあつたおを松や空を陳の羽 鳥落人 惟然
 夜よあつたし 兎らきみらる程 蒲萄坊 千那
 夜の日やふ枝の小家の様 井 大垣氏 如行
 おもひきき子の夜とてやまの雨 官崎氏 荊口
 心入るやあまのつちお梅也 菅沼氏 曲翠
 袴のあま知舟入らまの道の雪 江田僧 李由
 くらあまの争やせりの月 大律尼 智月

中興名譽

集とるまの月雀とるまの時鳥
すし形まてけの目もぶる花
やうさか昔々旅々水鏡
五月もやあまねる寝の月
早指し里中野分の朝かひ
家くや一技のの菜と食
也
乙兒
蝶夢
夢多太
月巢
完来

五贊

女の向小園とけりたる小
菊の形小菊たきり
卒都染小町
枕燈小菊燈花の影
雪女
瓦明橋上小琴と弾は終る

七月原のま踏
其雅樂乃勿と於

夕のほに結圓美人や系
解阿字と初と推と箱の事
廿四果と卒都婆小所
こしらひ日と地
雪女唯白妙忠い
琴の多今時
乃礼氏者

駿驥十二吟

春蛇亭了郎

海花乃溪忠沼津

不二殿尺原乃春色長

月圭舎龜六

去原乃龍人

一閑亭斗衡

蒲原乃浦風きり田子神所

松柯亭葛人

樽拍子ハ漕入る田井の窓永

竹陽亭扶老

之保は見え無は白波社の月

月太良悟泉

川舟の急車と戦ふ江尻火

雪屋人月巢

國み肩やま山路の松

歩里亭掬舟

梅の葉子乃窓の巻紙

月連舎巴明

床の紫糸奇人窓借取巻紙

橋舎欄挑壺

藤枝や花の影

此城の松

孫磨盧居逸

小刺降 勅乃名出回也

影よとあつて年乃に残る一筆

天の御志古後之今皆古人

とふふ松を柳 追慕る可き

國なる家年 記さる小糸溪乃嗚呼

美のよとあつて年乃に残る一筆

川流のよとあつて年乃に残る一筆

あらむ

観 望 亭

里 子 松 乃 可 也

松乃林亭乃了

八十進

壽家夫人 平和度

七

御書

平和度

楚巴靜謹書

三才之世所難為之風雅のこころを

皇中若由之類をこころを久きなるを

静のこころ東より西海は清みとす

節を度するの徳日記にす

長

浦

王持心... 抄... 卷三...

入... 抄... 卷...

樣... 抄... 卷...

一集... 抄... 卷...

一集... 抄... 卷...

癸巳夏日... 阿用... 詩... 旭... 岳



巴... 抄...

... 抄... 卷... 年



